

子どもたちも書き終る。

さあ、鉛筆を帳面にはさんで、閉じなさい。そしたら、その上に本を開いたままこう置きなさい。(開いたままそれをふせるよう示す)そうやって、手をおろしなさい。みんな見つかって下さい。おっ、目をふらふらさせるなよ。一ぺん声を出さなさいで読んでみましょうね。

## 五 よむ

指黙読

師のむちに導かれながら、板書をゆっくりゆっくり黙読していく。子どもたちの眼とくちびるが動く。

さあ、こんどは声を出して読みます。大きい声を出して読んで下さいよ。「にわとり」から、しっかりいきましよう。はい。

指音読

師の呼吸のあったむちによって、張りのある声で一斉に

指音読。

合唱団を指揮するかのよう。

## 六 とく

さあ、「にわとり」「犬」「ねこ」「ろば」今までは、別々の所におったでしょう。飼われていた人も違ったり、場所も違ったのね。今までは違ったが、こう集まってみたら、似たところがあつたでしょう。にわとりも、犬も、ねこも、ろばも、何か似ておつたでしょう。あなたは。

○ 家を逃げ出した

そう、家を逃げ出したもの、家から追い出されたものばかり。みんな家のないものばかり。似ているね、これは。もう一つ似ているところがないかな。あなたは。

○ はい。あのー、みんなないたり……

うまいこと言ったなあ。みんなひどい目にあつて、なっていることが似ている。うまいこと言ったなあ。そして、もう一つ。

○ ?

これ、これ、これだ(おなかを指さして)

これ、どうなの。あなたは。

○ 四ひきとも動物

うん……。おなか、これが今どうなの。あなたは。

○ おなかがへっている

\*個人作業が終わったので、次の準備をしっかりと指示している。

いつもは、机の上を片付けてしまつてから、五よむに進むのであるが、今回は、意図的に残している。(最後に、訳が分かる)

ここでも、スタートを揃え、意識の集中を図っている。

(最近、集中力の持続を図るモジュール授業が脚光を浴びているが、ここでは活動の質を変えている)

## 五 よむ

指黙読

(これで、集中が高まり、拾い読みの子にもよい訓練になっている。一年から四年まで続けると、螺旋的向上になり、皆読につながる)

指音読

(指黙読で高まった意欲を発揮する場である。学級の一体感も生まれる、落ち着いた学級にもつながる)

## 六 とく

○ 事実・区分

今までは、「にわとり」「犬」「ねこ」「ろば」は、別々のところにおつたでしょう。こう集まってみたら、似ているところがあつたでしょう。何が似ておつたでしょうか。

(事実というのは、書かれた言葉を関連づけることである)

ぺこぺこじゃないの。家をとびだしたり、追い出されたりして、何も食べる物がないからして、おなががぺこぺこだろう。宿なしで、腹ぺこだ。それで、四匹で楽隊をやつて、どこへ行こうということになったの。あなたは。

○ プレーメン

プレーメンという所へ行こう。そして楽隊をやつていこう。ところが、家がなくちゃ困るだろう。はらぺこじや困るだろう。だから、プレーメンに行つて、家を求めて、そして、楽隊をやつて、宿なしでないように、はらぺこでないようにしようと言ふことになつたでしょう。さあ、初めて楽隊をやつて聞かせたところ、何番？ そんなことわかるさ。あなたは。

○ 五番です

かな？ あなたは。

○ 六番です

六番（6に○をつける）ここで初めて楽隊をやつて聞かせた。この初めて楽隊をやつて聞かせたとき、どろぼうたちは、どこにおつたの。あなたは。

○ 外に逃げ出してしまつたの

楽隊やつたときは、四匹は外におつたでしょう。楽隊

やつたら、これ、変つてしまつた。どろぼうたちは、外へ逃げ出してしまつた。四匹はどうしたの。あなたは。

○ 家の中

家の中へはいりました。えらい家、見つけたもんだな。家が欲しくてプレーメンに出かけたでしょう。さあ、どろぼうたちは、それであきらめたかな。あなたは。

○ どろぼうのかしらが、あのう、子分に見てこいと言つて……

そうね、もう一度、様子を探らしたんだね。どろぼうのうちひとりが家の中へはいつたでしょう。どろぼうたちは外で待つておつたでしょう。そしたら、家にはいつたひとりは、かしらに何だと言つたか。あなたは。

○ まものがいる

そう、分るか「まもの」って。おぼけだよ。（ゆっくり低い声で、薄気味わるいような声で、そして、急に）「うわーっ」というおぼけだよ。（前の二、三人びっくりする。）

は、は、は、は、だから、ひとりは真青になつてかしらに報告した。そんな時、家にもどれるか。もどれないから、みんな逃げて行つてしまつた。そして、とってもいい家をただでもらつてしまつたというお話だね。

343

宿無し・腹ぺこと四匹の動物が関連付けられたので、楽隊をしてどこへ行こうとしたかと、問いを入れることで次の山へと自然につながるようになっている。

二とくの題目で「プレーメン」を扱っていない訳が分かる。

二とくの「ひびき」では、「一番先に楽隊を聞かせたのは誰だ」と問うているが、ここでは、「初めて楽隊をやつて聞かせたのは何番か」と問いの方向を変えている。

6番で、「楽隊を始めて聞かせたとき、泥棒達はどこにおつた」と、二とくでの問いと、視点を變えている。これで、理會がより深まるのである。叙述面（事実）には、厚みがあるということである。

「どろぼうたち」と「四匹」の關係をはつきりさせる問を出し、七つの言葉を関連付けている。

声にも工夫がある。情景が出る。事実と区分の扱いが、途切れないで自然に調和している。

（1から4までと5から7までに区分されたことになり、山が自然と浮かび上がってくる）

これ、ずうっとこう読んでみて、おかしいなあ、おもしろいお話だなあ、と思うところ、何番かな。どこが一番おかしいかな。あなたは。

○ 六番

六番。これ、初めて楽隊をやって聞かせたところ。ここがとってもおかしいところだね。(6を黄チョークで○をする。◎になる。)

あしたは、ここをやります。ここをお勉強したら、とってもおかしい話だなあ、おもしろいなあということになりますよ。あしたも、しっかりお勉強してみましようね。時間があるから、もう一ぺん七人で読んでもらいます。あなたが一番、次はあなた二、次、三、四、五、あなたが六、そして、あなたが七と、あなたまでね。さ、それじゃ読んで下さい。

七よむ

七人で本文を読む

はい、本を置いて下さい。それじゃ、今日家に帰ったら、しっかり考え、考え、読んできて下さいね。

静かにおじぎされる

第一時板書事項

ブレーメンの

がくたい

7	◎	5	4	3	2	1
どろぼうたち	四ひき	どろぼうたち	ろば	ねこ	犬	にわとり

第二次指導(二時間目)

始業ブザー鳴る

さ、本を開いておいて下さい。それじゃ始めましょう

◎山

「この話を読んでみて、おかしいなあ、面白いお話だなあ、と思うところは「何番」と、一番おかしいところが山である。」

○余韻

家でもら番を読んでみよう。

七よむ

・普通は、四かくで板書した事項を読ませる。

(ここでは、全文を順繰りに読ませている。四かくの後、教科書を仕舞わせない訳がここにあった)

・短い文章の場合には、第一次指導と第二次指導を組み合わせた授業をすることがあるが、照沼校長先生(茨城県大宮小学校)が、その傾向に注意喚起をされていたことがある。第一次指導を丁寧に扱う意味が、この筆録を読むと、分かって来る。

・詩の場合には、一時間扱いにすることが多い。それで、二とくまで、第一次指導扱いで、三よむからを第二次指導扱いと考える。

次時の予告

・自宅学習の方向を話す。

\* 終わりの挨拶も自然に……。